

事例

「わくわくクッキング教室」

— 高槻市立五領小学校 —

1. 実践の概要

(1) 五領はひとつ

五領小学校では、以前から五領中学校区の学校・園の連携の一環として、五領地区教育推進連絡会が中心となり「五領はひとつ」を合い言葉に、校区の課題を共有し、協力しながら課題解決に向け取り組んでいる。

校区の子どもたちが心身ともに健全に育ち、確かな学力を身につけ創造的な活動を活発にするため、体力づくりをベースにしながらか区小中三校において「五領中学校区広域いきいきスクール」を立ち上げ、校種間の継続性や系統性を図りながら体力づくり・学力充実を目指している。また、小中一貫した不登校児童生徒の対応や生活指導の校種間の段差解消など9年間を見通した教育活動を行っている。



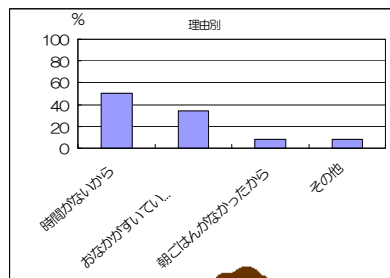
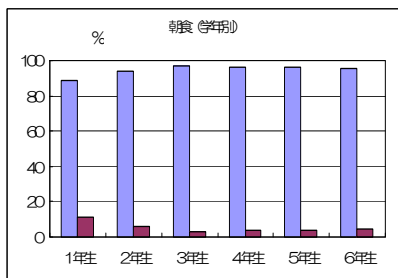
(2) わくわくクッキング教室

① ねらい

規則的な食事習慣を育て健康な身体作りを目指すため、就学前から保護者の意識を高める。

② 取組みの概要

体力づくりの取組みの一環として、現在の子どもたちの実態を捉える為に、全校児童を対象に朝食に関する調査を実施した。その結果、学年別に見て1年生の欠食率が最も高く、姿勢が悪い、集中できないなどの気になる子どもの実態と重なりが見られた。曜日別では、休み明けである月曜日の欠食率が高く、休日の夕食時間や就寝時間等との関連も推察された。



<左・食べた、右・食べなかった>

そこで、「わくわくスタート事業」の一環として、新入学児童保護者対象の「子育て講演会」とセットで「わくわくクッキング教室(朝食メニュー)」を開いた。

校長先生インタビュー

一緒に子育てを考えるきっかけに

当日は、新1年生の保護者約20人が集まってくれました。食事、特に朝食の大切さに関する話や忙しい時に時間短縮できる料理の紹介の後、みんなで朝食メニューを料理しました。実習しながらみなさん空気あいあいとして話は料理のことから子育てのことへと広がっていきました。

料理が完成してお互いに試食した後に、入学までに身につけておいてほしい基本的な生活習慣などについて話しました。保護者の方は、「忙しい朝も子どもと一緒にこれから頑張ります。」と話してくれました。

給食ボランティア

H17.4月22日から5月27日の22日間

1年生の保護者に呼びかけて、1年生の給食に際して毎日3人ずつおうちの方に手伝ってもらっています。他の子どもの様子も見る事ができて大変好評です。

(3) 2年生と幼児の交流

五領小学校は幼稚園と隣接している。1階が幼稚園、2階が小学校の多目的教室というように校舎を共有している部分もある。

この日の交流は、隣接する幼稚園の園庭に2年生全員と幼稚園の年長児が集まって、それぞれ運動会で演じたダンスを披露しあうことから始まった。それぞれ1ヶ月以上練習をしていないが、ほとんど間違わずに上手に踊れた。



その後、2年生が準備しているゲームランドがある小学校の多目的ホールへ移動し、園児は2年生が作ったおもちゃに挑戦して遊んだ。2年生は生活科で作ったおもちゃを園児たちが楽しんでいる様子にとっても満足そうな様子だった。

この他に、給食交流や「6年生をおくる会」も幼児と一緒に実施している。

校長先生インタビュー

「新1年生の「登校しぶり」を減らすために！」

本校は以前から地域の子ども全員を対象に、五領地区教育推進連絡会が中心となり「五領はひとつ」を合い言葉に、校区の課題を共有し、協力しながら課題解決に向けて取り組んできました。

ところが、私が着任した年に、1年生の登校しぶり児童が多くでました。初期対応を大事に、色々な手を駆使して2年生の始業式には全員笑顔で登校してくれましたが、この時、本当に幼保小連携の大切さを痛感しました。そこで色々今後の打開策を考えました。

まず、隣接する五領幼稚園と共有する校舎の2階を低学年棟（1階は幼稚園）に決め、25分の休憩も自由に園庭で遊べるようにしてもらいました。

また、「給食ボランティア」を保護者にお願ひし、保護者どうしがつながり合える場としました。「朝食アンケート」をとって食生活から見直したことをきっかけに、幼稚園の保護者にも基本的な生活習慣を入学まで身につけるようにお願いしました。

その他にも、幼児と児童の交流や教員連携はもちろん、国の研究開発事業なども受け、特に配慮の必要な子どもに関する合同研修など積極的に推進するようにしました。



2. 連携のポイント

- 地域のつながりを背景に、五領中学校区の幼保小中全ての教員が「地域のめざす子ども像」を共有しながら、連携をすすめている。
- 不登校、学力保障など教育課題解決の一環として幼保小連携を位置づけ、組織的に取り組んでいる。
- 子育て支援にも積極的に取り組みながら現在の子どもの課題に対応している。